

後漢洛陽城の可視領域と皇帝陵との空間関係
——洛陽都城圏の様相に関する基礎的考察——

茶谷 満

キーワード

洛陽城 後漢皇帝陵 都城圏 可視領域分析

1. はじめに

洛陽は長安と並ぶ中国の二大古都である。中国史の中でこの二大都市は「都城」として、数多くの研究がなされてきた。特に漢代から隋唐代については、日本の都城造営にも大きな影響を与えており、日中両国の多くの研究者が研究対象としている。

都城研究の中で大きく問題とされているのが、「都城」が内包する空間がどのような構成となっているのか、である。多くの研究者は城壁に囲まれた部分を都城とするが、前漢・後漢・南北朝・隋唐など時代とともにその内包する空間構成は常に一定ではなく、「都城」の語の使用には注意が必要である。いわゆる首都機能としては、宮殿施設や祭祀施設、役所機能、市民の居住区など多くの施設がその構成要素となるが、前漢の長安城、後漢の洛陽城を見る限り、城壁の内部はほぼ宮殿と政治的機能を持つものでほとんどが占められている。つまり、首都としての洛陽を見る場合、城壁の有無にかかわらず、首都機能を構成する諸要素を包括する空間という視座が必要である（塩沢2003）。そして当時の皇帝陵は単に王朝の正統性や威信を示すものだけではなく、その配置／選地には当時の思想的背景が色濃く残されているものと考えられる。

近年、中国河南省洛陽市では高速道路開設などの開発に伴う緊急発掘調査が数多く行われ、後漢皇帝陵園遺跡や三国魏の曹休墓など重要な発見が相次いでいる。また、それに並行して洛陽市第二文物工作隊の分布調査（2007）や韓国河氏の後漢皇帝陵に関する研究（2007）など、後漢時代に関する調査・研究報告が多数発表され、にわかに注目を集めるようになってきている。

これまで後漢皇帝陵は、前漢皇帝陵に比べて調査研究が進んでおらず、その存在は認められているものの、不明確な部分が多く残されていた。特に後漢皇帝陵の比定については、『中国文物地図集 河南分冊』（国家文物局 1991）にも掲載されている、清代の龔崧林の比定が近年までは一般的であった。しかし、陵墓がすべて邙山山中の墳墓に比定されるなど文献の記載と異なるものが多く、また根拠が乏しいことからこの考えはすでに否定されている。現在では、文献の記載および洛陽市周辺に所在する大型墳墓の存在から、洛陽城の北西方向に 5 基、南東方向に 6 基の皇帝陵が存在することで多くの研究者間で考えがまとまっている。

ただし、そうした現状の中でも大きな問題となっているのは、黄河南岸に位置する光武帝原陵であり、その比定地は他の後漢皇帝陵と比べて極めて異質である¹。前漢の首都である長安は、長安城と高祖長陵を結ぶ南北軸を基線として発展し、長安城を中心とした空間配置が形成されており²、「都城」と「皇帝陵」の空間構成は密接な関わりがあることが想起できる。であれば、後漢時代の首都である洛陽城と皇帝陵の関係についても同様の関係が想定しうる。

そこで本稿では、発掘・分布調査の成果や衛星画像、GIS(地理情報システム)の可視領域分析を利用して、洛陽城と後漢皇帝陵の空間関係について検討を行う。

2. 洛陽の環境

2-1. 地理的環境

洛陽は中華人民共和国河南省の中南部にあたる。黄河中流南岸に位置し、周囲を丘陵に囲まれた盆地である。北に邙山、東に嵩山、南に伊闕山・万安山、西に周山といった丘陵もしくは山脈の支脈が洛陽を取り囲み、盆地中央には伊河・洛河という2条の河川が西・南西から東へと流れている。この2河川は偃師県で合流して一つとなり(伊洛河)、さらに東の鞏義県を通過して黄河に流れ込んでいる。

北側丘陵である邙山(別名:北邙)は、洛陽の北側を東西方向におよそ190kmにわたって連なっており、北西にそびえる崤山の支脈である。俗諺に「生在蘇杭、死葬北邙」とあり、古代帝王の理想の埋葬場所とされてきた。緩やかな丘陵上には後漢皇帝陵をはじめ、多くの墳墓が築かれ、現在でも確認することが可能である。西にそびえる周山(別名:秦山)は洛陽市西南に位置する崤山の支脈である。周霊王墓がこの地に築かれたとされており、「周山」と呼ばれている。伊闕山(別名:竜門山または鐘山)は洛陽南に位置し、西の熊耳山の支脈で東の嵩山に連なる。伊河を挟んだ対岸の香山とによって形成される狭い谷状地形が天然の門戸となっており、またその岸壁には世界文化遺産の「龍門石窟」が造営されている。洛陽東南には中岳嵩山に連なる万安山(玉泉山または大石山)があり、その険しい地形は洛陽東南部の要衝となっている。

また、洛陽には多くの河川が存在する。邙山北を流れる黄河はもちろんのこと、洛陽盆地中央では洛河・伊河の2大河川が存在し、北から洛河に流れ込む瀍河と西から洛河に流れ込む澗河、そして澗河の支流で、漢魏洛陽城まで巡る谷水といった河川がある。これらは灌漑や水運、防衛など様々な面において古代の人々の生活に密接に関わっていたと考えられ(黎承賢ほか1989)、氾濫によってこれまで幾度か流路が変わっていることが知られている。

地質は第四紀に沖積した黄土に属し、黄砂質粘土層と黄土質粘土層が広がる地域である。また気候は大陸性季節風区の温帯に属し、年間平均気温は14℃前後、降水量は600mm程度で日照時間も多い。こうした恵まれた自然環境、特に邙山南麓のなだらかな地形は日常

¹ 現在の光武帝原陵は邙山より北、黄河南岸の孟津県鉄謝村にあり、ここでいう後漢皇帝陵北区には含まれていない。

² 長安城の都市計画に関しては従前から内外の研究者により様々な意見があるが、ここでは黄曉芬氏の一連の研究成果(2006a、b、2010、宇野他2010)を参照されたい。

たりがよく、また冬の寒風を防ぐことが人々に快適な住環境を与え、四方を山に囲まれることで防衛上有利な地であり、かつ河川が物資運搬に非常に有益に働くため古くから都市が築かれ、多くの王朝がここに都を置いた。

2-2. 洛陽の歴史的環境

河南省の洛陽～鄭州の一带は中国の初期王朝が形成された中原とよばれる地域である。先に述べたようにこの中原とよばれる地域は、夏王朝の首都と考えられる二里头遺跡、殷（商）代における鄭州商城・偃師商城など、その後の中国史上で重要な王朝が誕生している。この中原という環境は、黄河中流域のエリアに属してはいるが、数十 km 南下して嵩山を越えると潁河上流／の水系に至り、またさらに南下すれば白河／長江水系にまで至ることができる。つまり、黄河水系のみならず淮河や長江水系といった南方とも直結できる位置関係にある。このことは穀類の栽培にもその様相が垣間見られ、一般に黄河水系ではアワなどの雑穀が、長江水系ではイネが栽培されているが、中原地域ではその両方が遺存する遺跡が多数存在している。

また、黄河中流域は黄河全流域の中でも比較的安全に渡河が可能な地域であり、黄河以北の地域との交通の要衝でもある。つまり、中原は中国大陸の東西、南北間の交通上の結節点（西江 1999）であるといえる。

殷（商）に続く周代では、現在の西安市西郊にあった豊京（のち鎬京）を首都として構えていたが、洛陽の地（その後の漢魏洛陽城の地）に洛邑（成周）を建設し、東方を治めるための拠点とした。紀元前 770 年には後継者争いと犬戎の侵入により、周王室は洛邑に遷都することとなる（以降、東周と呼ばれる）。現在の洛陽市街地中心に、1 辺約 3km の城壁に囲まれた城郭が東周の「王城」に比定されている。この城内西南部には規模が縮小された形で河南県城に比定される城郭がある。この時期において、当初造営されていた成周城とどのような関係があったのかは今のところはっきりとわかっていない。佐原康夫氏は、「前 4 世紀の末、赧王の時代に周は東西に分裂し、王のいた王城が西周（現在の洛陽市内の東周王城跡）、成周（漢魏洛陽城の地）が東周と呼ばれた」とし、戦国時代における両周の位置関係を推定している（佐原 2007）。その後、秦に滅ぼされた後の状況として、東周は洛陽県、西周は河南県となったとし、「洛陽」の地名の始まりについて触れている（佐原 2007）。漢代以降の都城・県城の立地を考えると妥当といえる。

前漢の高祖劉邦は漢王朝の首都を洛陽とし、南宮で酒宴を開いたことが史記に記されている（その後すぐ長安に遷る）。つまり、文献記録から推測するに、戦国～漢の再統一までの間に成周城（洛陽城）は形としては存続し、後漢洛陽城として確認されている城内の宮殿等諸施設がすでに建設されていた可能性は非常に高いと考えられる。

洛陽郊外に目を向けると、漢代には西の函谷関・南の伊闕関・北の孟津関・東の成臯関の「四関」が置かれた。後漢末の霊帝はさらに数を増やし、函谷関・伊闕関・広成関・大谷関・轅轅関・旋門関・孟津関・小平津関の「八関」を置いたとされており、洛陽を囲む自然地形をうまく利用し、防衛上・交通上の重要拠点としていたことがうかがえる（塩沢 2003）。このように洛陽は、中国内における東西南北の交通・環境の重要な結節点という特性とともに、邙山、嵩山など周囲を丘陵・山脈で囲まれた、いわば天然の都城的空間で

あり、中国内を治める上で重要な地であったといえる。

3. 洛陽周辺の遺跡と空間分析

3-1. 洛陽周辺における皇帝陵、諸施設

洛陽市周辺には巨大な墳丘墓が数多く存在する。それらは主に後漢、西晋、北魏などの皇帝陵で、これまでの調査や文献等から墳形で各王朝の皇帝陵の分類が可能である。すなわち、後漢皇帝陵は低平底広な円墳³、西晋は墳丘を持たず、北魏は高大な円墳、唐は高大な方墳であり(塩沢 2010)、GoogleEarth などの衛星画像からも確認することができる(茶谷 2006、洛陽市第二文物工作隊 2007 など)。遺跡の分布はすでに 1991 年に国家文物局が主体となり、『中国文物地図集 河南分冊』(1991) という遺跡分布図を著しているが、地図および情報の精度が高くなく、実際の位置関係を把握するには十分ではない。GoogleEarth の衛星画像精度は徐々に高くなりつつあり、現段階では洛陽盆地内をかなりの高精度で地表物を確認することが可能である。

また、筆者は以前アメリカの軍事衛星 CORONA の画像を用いた判読を試みており(茶谷 2006)、近年土地開発の著しい中国国内において、より古い状態の地表面の情報を把握する上で非常に有効である(図 1、2)。これらリモートセンシング技術で地表の様相(墳丘墓や城壁の形状)を把握するとともに、筆者は実際に現地を訪問し、後漢皇帝陵と比定されている洛陽市周辺の大型墳丘墓をはじめとした踏査を行い、衛星画像との照合も行っている(図 3)。このほか、韓国河氏や鐘方正樹氏らをはじめとした後漢皇帝陵の研究者らの研究成果(韓国河 2007; 鐘方正樹 2004; 鐘方ほか 2009)も参照する⁴。

後漢皇帝陵(大型墳丘墓含む)、漢魏洛陽城、県城、後漢末に築かれた八閩等を地形図にプロットしたものが図 4 である(塩沢 2003 を援用)。文献記録によると、後漢時代には洛陽西北に 5 基、東南に 6 基の陵墓が築かれたとされているが、大型墳丘墓の分布状況を見ると、洛陽盆地の北側(北区)に 6 基、洛陽盆地の南側に広がる万安山の北麓(南区)には 10 基以上の分布がみられる。これらの状況は皇后陵など皇帝陵以外の墳墓も含まれていると考えられる。

洛陽城は盆地のほぼ中央に位置するが、洛河・伊河が盆地中央を流れているために南北方向ではやや北寄りに位置する。盆地の西端に近い位置に河南県城、東端に近い位置に偃師県城が建設されている。皇帝陵区とこの 2 県城は、ちょうど洛陽城を中心にして東西南北(北がやや西に振れるが)に計画的に配置されている。また、洛陽城がやや盆地北寄りに位置しているために北区の陵墓が近くなっているが、洛陽城の南に築かれた霊台付近を中心と考えると北区・南区ともほぼ等距離に近くなる。また北区では 3 基、南区では 4 基の皇帝陵が直線的に配列されているが、筆者はかつて北区の陵墓は洛陽城西の白馬寺を、南区の陵墓は洛陽城中心を意識したもの、と考えていたが、塩沢裕仁氏の指摘(塩沢 2010)にもあるとおり、いずれの陵区も霊台(図 5)付近を意識して配置した可能性も考えられる。

³ 光武帝原陵、明帝顕節陵については文献の記載および墳形の観察から方墳との見解が多い(鐘方 2009 ほか)。

⁴ 陵墓の番号は塩沢裕仁『千年帝都洛陽』(2010)を参照している。

3-2. GISによる空間分析 —可視領域分析—

次に、漢魏洛陽城と後漢皇帝陵（と推定される大型墳墓）の関係性を把握するために、洛陽城からの可視領域分析を行う。可視領域分析とは字義のとおり、ある地点から見える・見えない範囲を分析するものであり、例えば古墳からの可視領域が古墳時代前期から後期にかけて可視領域が縮小する傾向にあることが明らかとなっている（金田ほか 2001）。大型墳墓が「見せる」「見える」ことを前提としていたと仮定すると、当時の皇帝が自身や先代の陵墓を城内から常に認知できる領域に造営していたと想定できよう。

具体的な手法は以下のとおりである。

筆者はこれまで、衛星画像による墳墓の判読や、衛星画像・旧ソ連製地形図等の地理情報を GIS で統合し、空間分析ツール（コスト距離分析、傾斜分析等）を用いた分析を行ってきた（茶谷 2006、2009）。本稿ではこれらの地理情報をベースとして、衛星画像の判読や発掘調査・分布調査によって得られた各時代の皇帝陵（もしくは皇帝陵と推定される大型墳墓）を地図上にプロットし、「可視領域分析」からその立地についての考察を行う。

可視領域分析は、ある地点からの眺望を図示し、その地点との関係領域を把握する目的で多く用いられる。ここでは、漢魏洛陽城を起点とした可視領域を計算・図示することにより、洛陽市周辺に所在する皇帝陵との関係性を把握する。

なお、ベースとなる地理情報は、標高データ＝SRTM30、地形図＝旧ソ連製 10 万分の 1 中国地形図であり、CORONA 衛星画像と Google Earth を併用して、墳墓の位置および城壁の形状等を確認した。可視領域分析にはカシミール 3D を用い、キャプション挿入などの図面編集に Adobe Illustrator を使用した。なお、用いた標高データの精度およびコンピュータの処理能力を勘案して、カシミールにおける可視領域計算範囲は洛陽城を中心とした半径 50km（およそ洛陽盆地周辺まで含む範囲）とし、計算設定は「高速」にした⁴。

分析結果としては、ほぼ予想通り洛陽城からは盆地内をほぼ見通せることがわかる（図 6）。盆地中央に向かう緩斜面がほぼ見渡せ、各丘陵の分水嶺で可視領域の境界となる。

注目したいのは北区よりさらに北に位置する光武帝原陵である。可視領域分析結果から、北区に分布する皇帝陵のうち M4 がわずかに可視領域の北側に位置するが、ほぼ可視領域内に立地するのに対し、光武帝原陵 1 基のみが大きくその外側に位置する。南区においてはすべて可視領域内にあり、洛陽城を中心とする認知的な都市空間（皇帝をはじめとした当時の洛陽城に住む人々の景観）に皇帝陵はほぼすべて含まれることになる。ただ 1 基、光武帝原陵のみがその外側、黄河南岸（現在の黄河河岸から 500m 弱の距離）に位置し、衛星画像において周辺に陪葬墓らしき墳丘も見あたらない。以前筆者が行った標高による墳墓分布においても、洛陽城より標高が高い位置に存在するものがほとんど（特に大型墳墓）（茶谷 2009）であるのに対し、この地は洛陽城と同程度の標高となっている。また黄河に面して洪水被害に遭いやすいという立地を鑑みれば、皇帝陵の立地としてはふさわしくない。こうした空間分析の結果から言えば、光武帝原陵は邙山上にあるほうがむしろ自然である。

⁴ 標高データで SRTM30 秒メッシュを使用する場合、カシミール 3D の可視領域計算で広範囲を指定する場合に精度が落ちることが明記されている。（カシミール 3D オンラインマニュアル <http://www.kashmir3d.com/kash/manual/index.htm>）

4. 考察

4-1. 洛陽「都城圏」について

2010年度日本中国考古学会において、西江清高氏が「都城圏」という考えを示した。「都城圏」とは、「城壁を都城の一要素あるいは一機能として相対化して考え、城壁の有無とは別に都城的な諸機能が、ときには広大な「地域」的空間のなかに分散的に配置された、まとまりある一つの関係圏」(西江 2011)のことである⁶。後漢洛陽城は現在も発掘調査が継続して行われており、次第にその全容が明らかになりつつあるが、現在までの成果では城壁内は宮殿が多くを占め、諸施設や集落群等の多くは城外にあったと考えられる。つまり、洛陽が首都機能を持つためには城内だけでは完結せず、周辺も含めた上で機能していたといえ(塩沢2003)、西江氏が述べたような洛陽「都城圏」というものを実態としてとらえる必要がある。

先に述べたように、洛陽盆地はいわば天然の城壁をもった都城的空間であり、洛陽城・皇帝陵・県城などを大きく包み込んでいる。これらの位置関係は自然地形に則ったものとしてはそれぞれが極めて対称的・幾何学的であり、交通網や防御機能も含まれているであろうが、より大きな思想のもとで計画的に建設されたものと想像できる。

佐原康夫氏は『周礼』の記載にある都城(理想とされる天子の都城)と洛陽の関係について、周礼が知られるようになった時代背景(前漢末～後漢)をもとに、周公の都城(古来からの都城の理想像)が洛陽そのものを指していく過程を明快に論じている(佐原 2007)。前漢高祖劉邦がはじめに洛陽を首都としたこと、後漢光武帝劉秀も洛陽を首都としたことを鑑みると、当時すでに洛陽が天子の都城たる地であった、世界の中心地ととらえられていたと考えられる。また、洛陽都城圏内におかれた皇帝陵区、県城、諸施設、園林などの対称的空間配置は、周礼の説くような方形の区画とは異なるが、空間をより単純化したものを想定すれば洛陽盆地のグリッド内に洛陽城を中心とした構造になる、とも言えよう(図7、塩沢2003を援用)。

4-2. 光武帝原陵の所在地について

いわゆる『帝王世紀』では、光武帝陵を含む5帝の陵墓が洛陽城の西北15～20里にあるとされ、邙山上の大型墳墓を光武帝をはじめとする五人の皇帝陵にそれぞれ比定する意見は近年の研究では多い(韓国河 2007、巖輝 2006など)。これに対して、『帝王世紀』上の墳丘形状・規模の記載「方三百二十三歩、高六丈六尺」と実際の踏査記録から、光武帝陵を現在の原陵に比定する意見(鐘方正樹ほか 2009)もある。

光武帝原陵の文献記録は上記のもの以外には見あたらないが、光武帝の最初の後である郭皇后は光武帝より先に亡くなっており、邙山に葬られたことが『後漢書』に記されている。これは必ずしも邙山に光武帝陵があると示すものではないが、皇帝・皇后クラスの墓域の形成を考える上では重要なものであろう。比定しうる直接の証拠はここでは挙げるこ

⁶ 同大会で口頭発表した松丸道雄氏の「王畿」概念もそれに近い。また、都城と市や集落群などを首都的空間としてとらえる考え方は、谷豊信氏(1999)や塩沢裕仁氏(1999)も言及している。

とはできないが、先の分布状況や可視領域分析等を考慮すれば、邙山上にある5基の大型墳丘墓のいずれかが原陵である可能性を指摘したい。

現在の光武帝原陵は立地的にも異質であり、塩沢氏が指摘するような臨平亭址または北魏の祭壇址、平勢隆郎氏が指摘するような戦国魏の会盟主催の地（台基）といった洛陽都城圏の枠外にあたる施設であった可能性を支持したい。ただし、韓国河氏が指摘するように（韓国河2007）、現在の光武帝原陵およびその周辺のボーリング調査によって墓道が見つかるなどの後漢時代の墓葬という物的証拠が今後発見されるようであれば、光武帝陵は極めて特異な例としなければならないであろう。

5. おわりに

以上、後漢洛陽城と後漢皇帝陵について、その位置関係から都城圏そして光武帝陵にかかる問題について考察を行った。

洛陽城と皇帝陵などとの関係は、自然地形を非常に活かしながらも洛陽城を中心とした対称的・幾何学的配置がなされており、見方によっては『周礼』に描かれている理想の都城形態を示している。つまり、洛陽都城圏は当時の理想的都城空間であり、世界の中心を体現したものと換言することもできよう。その後の多くの王朝がこの地に都城を建設することも一つの証左であり、時間的な比較対象として周～隋唐、また空間的な比較対象として長安を取り上げ、検討していく必要がある。

一方、こうした空間構成の秩序の中において、後漢光武帝原陵は他の皇帝陵群とは可視領域分析や標高分布などの諸条件が異なっており、この分析を通して考えるならば、洛陽都城圏の枠外にあたる施設の可能性がある。

本稿は遺跡および地理情報を中心とした考古・地理学的な手法による分析であり、文献記録との詳細な検討には至っていない。また、思想的背景として皇帝陵の選地に風水が用いられたとの意見（焦南峰・馬永羸2011）もあり、葬制と選地の関わりについても今後検討する必要がある。

なお、本稿では洛陽盆地の空間構成に関して、塩沢裕仁氏の研究成果（2003）を援用している。

参考文献

（日本語）

今井晃樹・丹羽崇史

2011 「2010年度大会テーマ発表『中国都城研究の現在』」『中国考古学』第11号：3-5。
江村治樹

1990 『平成元年度科学研究費補助金一般研究(C)研究成果報告書 春秋・戦国・秦漢時代の都市の構造と住民の性格』名古屋大学。

宇野隆夫・黄曉芬・宮原健吾・臼井 正

2010 「西漢皇帝陵と長安城の測量」、宇野隆夫（編）『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』65-78、勉誠出版。

鐘方正樹

2004 「日中における王陵の墳形変化とその関連性」『博望』第5号:15-37。

鐘方正樹・宮崎雅充・高木清生・山口典子・大野壽子

2009 「後漢皇帝陵踏査記」『古文化談叢』第61集:201-229。

金田明大・津村宏臣・新納泉

2001 『考古学のためのGIS入門』、古今書院。

北田裕行

2009 「中国古代都城の園林配置に関する基礎的考察」、館野和己(編)『古代都城のかたち』、pp.201-227、同成社。

黄曉芬

2006a 「漢長安城建設における南北の中軸ラインとその象徴性」、『史学雑誌』115巻11号:362-375。

2006b 「前漢帝都における建築中軸線の考察」、宇野隆夫(編)『実践 考古学GIS』362-375、NTT出版。

2010 「漢帝都長安の造営と設計思想」、宇野隆夫(編)『ユーラシア古代都市・集落の歴史空間を読む』79-98、勉誠出版。

佐川英治

2011 「漢魏洛陽城研究の現状と課題」氣賀澤保規(編)『洛陽学国際シンポジウム報告論文集 東アジアにおける洛陽の位置』、pp.115-138、明治大学東アジア石刻文物研究所。

佐原康夫

2007 「周礼と洛陽」、館野和己(編)『古代都市とその形制』、pp.31-47、奈良女子大学。

2009 「中国における都城の理念と東アジア」、館野和己(編)『古代都城のかたち』、pp.129-151、同成社。

塩沢裕仁

1999 「建康石頭城と洛陽金墉城—都市空間と防衛構想に触れて—」『法政史学』第51号:34-65。

2003 「洛陽八閤とその内包空間—漢魏洛陽盆地の空間的理解に触れて—」『法政考古学』第30集:89-106。

2010 『千年帝都洛陽 その遺跡と人文・自然環境』、雄山閣。

齊東方

2009 「中国古代都城の形態と機能」、館野和己(編)『古代都城のかたち』、pp.153-174、同成社。

外村 中

2010 「魏晋洛陽都城制度攷」『人文学報』第99号:1-29。

谷 豊信

1999 「第10章 秦漢時代」、小沢正人・西江清高・谷豊信(編)『中国の考古学』、pp.275-314、同成社。

茶谷 満

2006 「衛星画像を用いた洛陽地域の墳墓分布について」『中国考古学』第6号:187-196。

- 2009 「GIS を用いた洛陽墳墓群の空間分析」『中国考古学』第 9 号 : 77-88。
- 陳 力
- 1998 「漢唐時代の都市計画における「中軸線」について」『阪南論集 人文・自然科学編』第 34 巻第 1 号 : 1-8。
- 1999 「東周秦漢時代の都市理論について」『阪南論集 人文・自然科学編』第 35 巻第 1 号 : 11-18。
- 西江清高
- 1999 「第 5 章 黄河中流域における初期王朝の登場」、小沢正人・西江清高・谷豊信(編)『中国の考古学』、pp.119-138、同成社。
- 2011 「歴史的「地域」としての関中平原「周原地区」」『南山大学人類学博物館所蔵考古試料の研究 高蔵遺跡の研究／大須二子山古墳と地域史の研究(南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター研究報告)』、pp.147-162、六一書房。
- 藤本 強
- 2007 『市民の考古学 2 都市と都城』、同成社。
- 楊 寛(西嶋定生監訳、尾形勇・高木智見共訳)
- 1987 『中国都城の起源と発展』、学生社。
- 劉慶柱・李毓芳(来村多加史訳)
- 1991 『前漢皇帝陵の研究』、学生社。
- (中国語)
- 陳長安
- 1982 「洛陽邙山東漢試探」『中原文物』1982 年 3 期(洛陽市文物局(編)2000『漢魏洛陽故城研究』pp.611-619 に収録)。
- 国家文物局(主編)
- 1991 『中国文物地図集 河南分冊』、中国地図出版社。
- 韓国河
- 2007 「東漢帝陵有関問題的探討」『考古与文物』2007 年第 5 期 : 10-17。
- 焦南峰・馬永羸
- 2011 「西漢帝陵選址研究」『考古』2011 年第 11 期 : 76-82。
- 洛陽市第二文物工作隊
- 2007a 「洛陽邙山陵墓群的文物普查」『文物』2007 年第 10 期 : 43-59。
- 2007b 「偃師白草坡東漢帝陵陵園遺址」『文物』2007 年第 10 期 : 60-73。
- 錢国祥
- 2002 「漢魏洛陽故城沿革与形制演變初探」『21 世紀中国考古学与世界考古学—紀念中国社会科学院考古研究所成立 50 周年大会暨 21 世紀中国考古学与世界考古学國際學術研討會論文集』、pp.437-452。
- 巖 輝
- 2006 「邙山東漢帝陵地望的探索之路」『中国文物報』2006 年 11 月 3 日(洛陽市第二文物工作隊(編)2009『洛陽漢魏陵墓研究論文集』pp.100-106 に収録)。
- 巖輝・張鴻亮・盧青峰
- 2011 「洛陽孟津朱倉東漢帝陵陵園遺跡有関問題的思考」『文物』2011 年第 9 期 : 69-72。

図版

図1 北区(山)の大型墳丘墓(後漢皇帝陵か)(CORONA衛星画像《USGS EROS DATA Center》)



図 2 南区の大型墳丘墓（後漢皇帝陵か）（CORONA 衛星画像《USGS EROS DATA Center》）

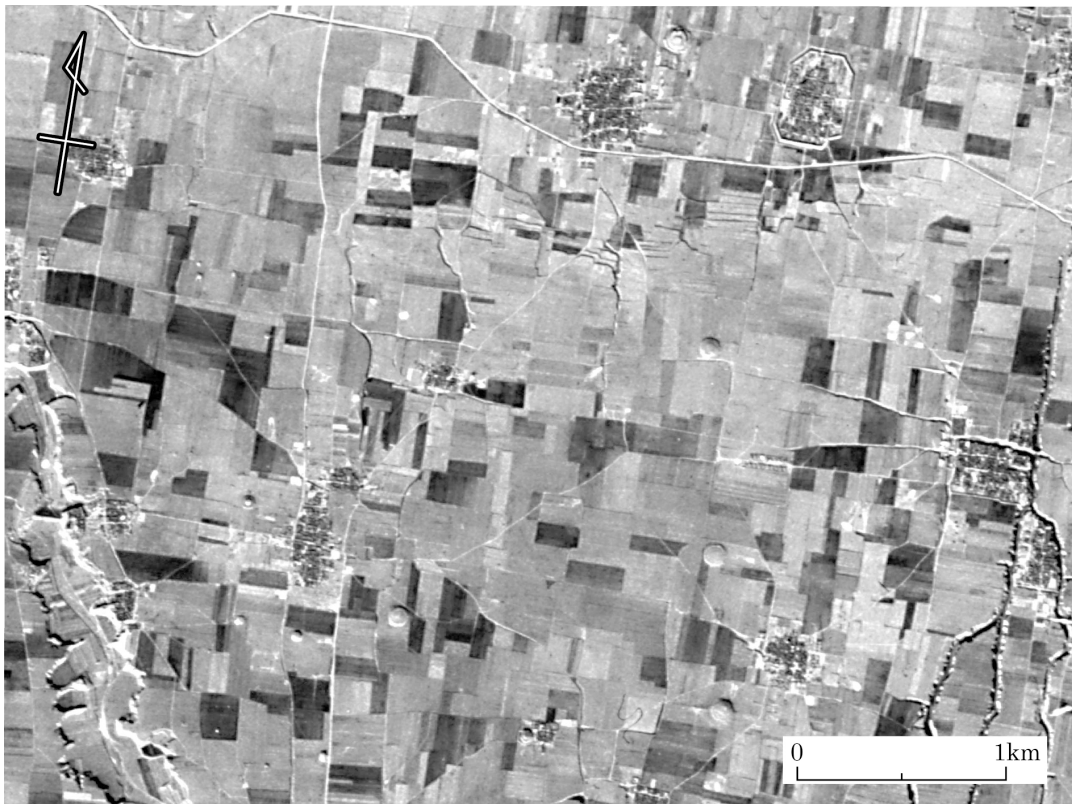


図 3 劉家井大墓（筆者撮影）



図4 後漢洛陽城および後漢皇帝陵分布図、旧ソ連製10万分の1地形図(112° E 34' 20' N ~ 113° E 35° N)をもとに筆者作成。なお、遺跡名称等は塩沢裕仁『千年帝都洛陽』(2010)を参照した。

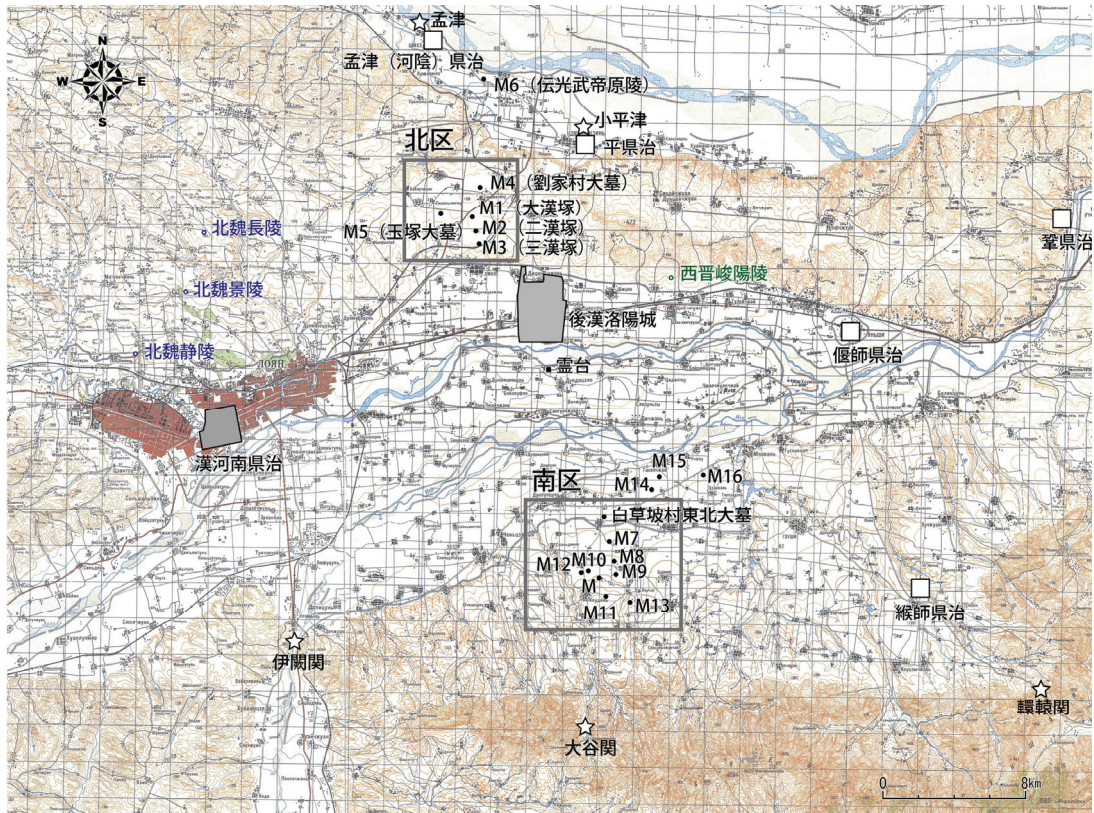


図5 霊台址(筆者撮影)



図 6 後漢洛陽城からの可視領域、旧ソ連製 10 万分の 1 地形図 (112° E 34' 20' N ~ 113° E 35° N) および標高データ (SRTM30) を Windows ソフト「カシミール 3D」にて合成し、後漢洛陽城からの可視領域を作成。

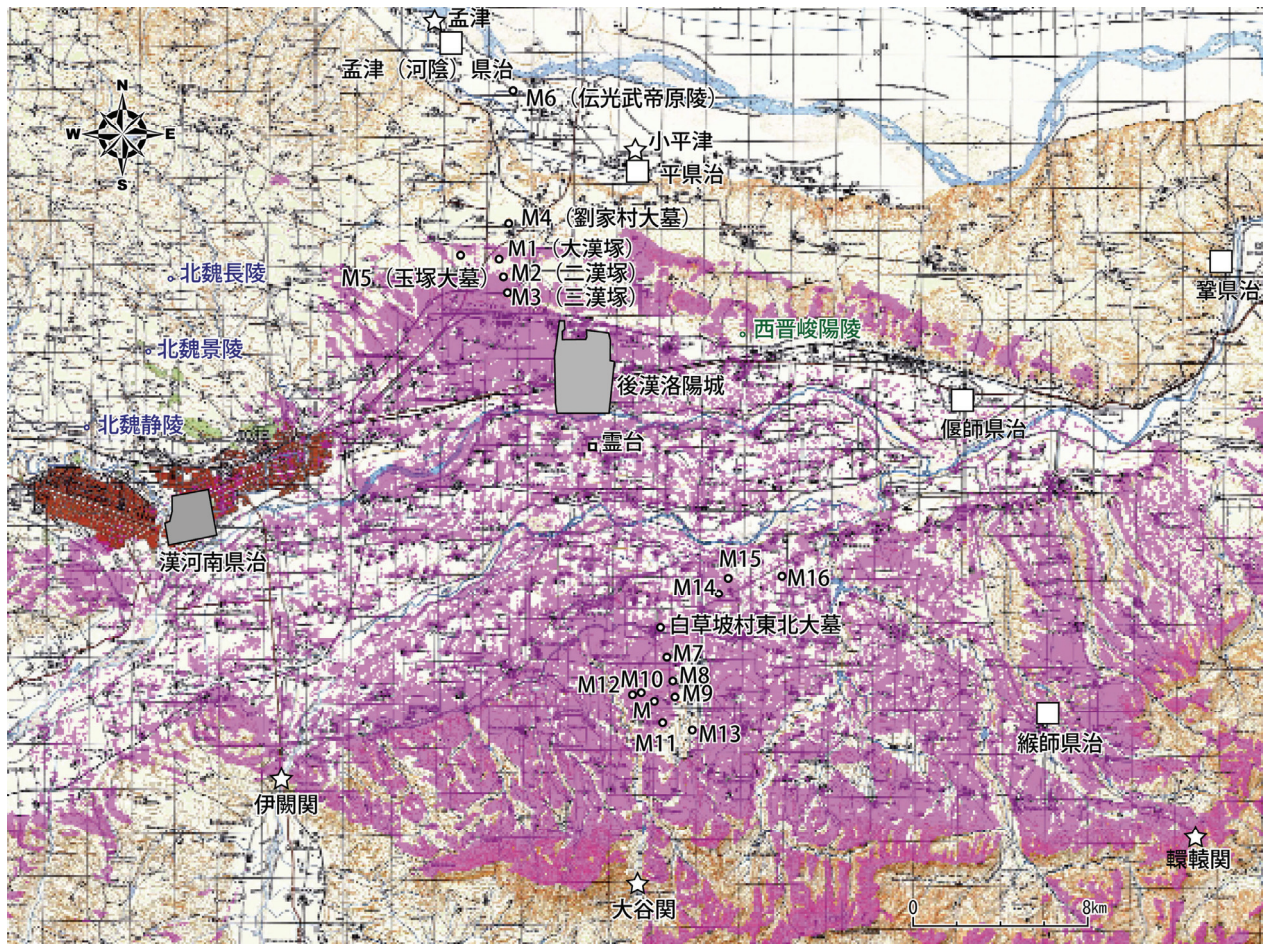


図7 洛陽都城圏模式図(塩沢2003を援用して筆者作成)

